

エッセイコンテスト3等賞

「フランス語とわたし」

齋藤牧子

今年の1月初め、私の母が91歳で亡くなった。数日後、フランスのアンヌ・マリーからお悔やみのメールが届いた。彼女は従兄の元妻で、文部省（当時）の国費留学生となり来日し、従兄が留学先のディジョンから帰国する前の2カ月間、我が家に滞在していた。外国人とはまったく無縁だった私の両親だが、アンヌ・マリーとは相性がよく、彼女は自然に我が家に溶け込んだ。従兄とはその後離婚し、赤ちゃんだった息子のロマンを連れてフランスに帰国したが、父が亡くなった時、東日本大震災の時、心のこもったメールを送ってくれた。

私は3月の退職を目前に、フランス語を学び、アンヌ・マリーと再会しようと決めた。思えば、私のフランス語との出会いは早期にあったのだ。小学生の時、『シャンソン・ド・パリ・デラックス』というアルバムでシャンソンに触れ、その音楽と言葉の美しさに感動した。泣きながら読んだルナールの『にんじん』で知った『ル・ボン・パン』という言葉。ラ・マルセイエーズをカタカナで歌ったこと、そのときのフランス語への興味や感動を持ち続けていたら、大学時代、フランス語の単位を落とすなんてことはありえなかつただろう。

齋藤先生が学生時代、偶然アテネ・フランセに出会い、フランス語の美しさに惹かれ、フランス語やそれを取り巻く世界との出会いの中で、フランス文化、人々の交流を深めていかれたということは、先生のフランス語への純粋な気持ちが人一倍強かつたためだと思う。フランス語は素敵である、話せたらいいと誰もが思う。しかし、それを確実に自分に取り入れていくのは並大抵の気持ではできないのだ。そして様々な出会いはそれに真摯に取り組んだ人にもみ訪れるのだ。

御茶ノ水でアテネ・フランセに出会ったように、齋藤先生は徳島で四国日仏学院に出会った。それはもはや偶然ではなく、必然であったのだ。そこでマダム・トゥシャルと出会い、彼女の相談相手になられたこと、娘の梨香さんとともにディーブ小学校と図画や絵本を通して交流されたこと、ご自身の医師という職業に関連して、青少年の喫煙問題を啓発するイラストを梨香さんとともに制作されたこと等、すべて先生が初めから意図されたことではない。しかし、一つ一つの交流に自然体で向き合ったことでさらなる出会いが生まれた。フランス語を通して先生は世界を広げていかれたが、フランスへの深い愛と尊敬が、結果として様々な縁につながったのだと思う。

私は、高校教師のかたわら日本語教師の資格を取得し、日本語ボランティアとして活動している。フランス語学習を通して、もっと世界を広げ、多くの人々と交流したい。

6月にトネール村でアンヌ・マリーと再会する。私のフランス語世界への第1歩だ。